

行動のなかの幸福

笑うから幸福なのだ

？
じっと考えてみよう

高校2年になった瑞季（みずき）は、はやくに父を病気で亡くし、以来、母と妹と3人暮らした。母は生活を支えるため仕事に忙しい。母とはいっしょに遊んでもらったことも、ましてや家族旅行などにも連れて行ってもらったこともない。が、明るく気丈にふるまっている母の姿には感謝をしている。瑞季も勉強と部活の合間にアルバイトをしている。大学が短期大学に進学するために、少しずつだが貯金をするためだ。

ある土曜の晩、母は瑞季にある誘いをした——

「明日の昼に、盲学校で朗読会のボランティアがあるんだけど、いっしょに行かない？ 生徒さんたちに本を読んであげる会よ。」

「えー、なんでわたしたちがボランティア？ うちこそお金なくて助けがほしいくらいなのに。そういうのって幸せで余裕がある人がやるもんじゃないの」……。瑞季はバイトの疲れや勉強の悩みもあって、つい、とがった言葉で返してしまった。とても行く気になれなかった。

翌日、朗読会から帰宅した母は、とてもすがすがしい様子だった。「健康で生きていられるって、それだけですばらしいことね」とひとこと放ち、さっそうと台所に立った。

？
「幸せだから、人助けができる」のだろうか、それとも、「人助けするから、幸せ」なのだろうか？



フランスの哲学者アランが『幸福論』（白井健三郎訳、集英社文庫版）で説く幸福は、一貫して行動主義的である。それを表わす有名な一節がこれである。

「幸福だから笑うわけではない。

むしろ、笑うから幸福なのだと言いたい」。

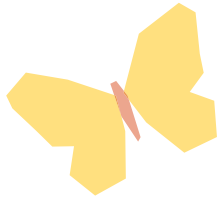
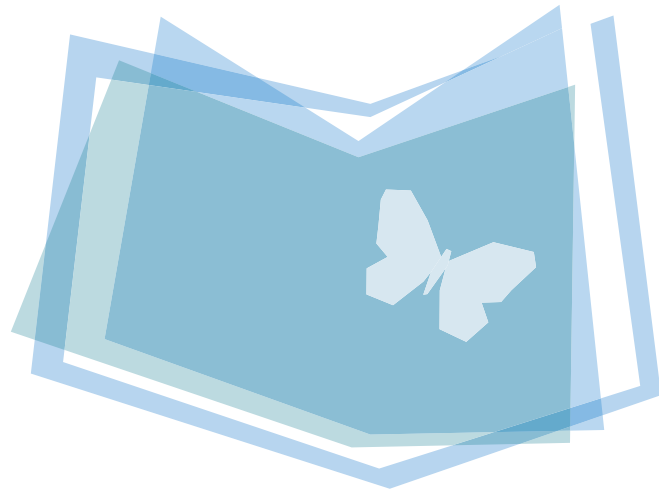
わたしたちのほとんどは、自分がまず幸福という状態にいて、だから笑うんだと思っている。逆に言えば、自分が幸福な状態にいなければ、笑うことはないと思っている。だが、アランはそう考えない。自分がどんな状況にあったとしても、心を起こして、まず笑ってみる。それが幸福なんだ、と。アランはこうも書く――

「人間は、意欲し創造することによってのみ幸福である」。

「悲観主義は気分属し、楽観主義は意志に属する。（中略）あらゆる幸福は意志と抑制とによるものである」。

悩みがなにもないことが幸福ではない。竜宮城のような楽園で永遠に暮らすことが幸福ではない。むしろ、自分の置かれた状況が苦しくとも、なにか理想に向かって創造していることとしたいが、ほんとうの幸福である。幸福はそのように、静的な状態をいうのではなく、動的な行いそのものであるというのがアランの主張だ。

もう少しゆるくとらえて、ある心地よい状態に身をうずめて、安楽でいられることが幸福だとしても、その幸福は、不安定で弱い幸福と言わざるをえない。そうした静的な安楽状態にとどまっている人ほど、いまの幸せがいつまで続くのか不安でたまらない、この幸せをなくすのが怖いと思いはじめめる。その心の状態をはたして幸福と言っているのだろうか。それに対し、意志を持つてなにかに動いている人は、苦しさをしんどさはあるが、その喜びは強くて安定している。



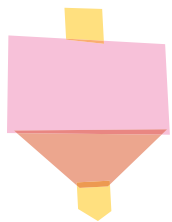
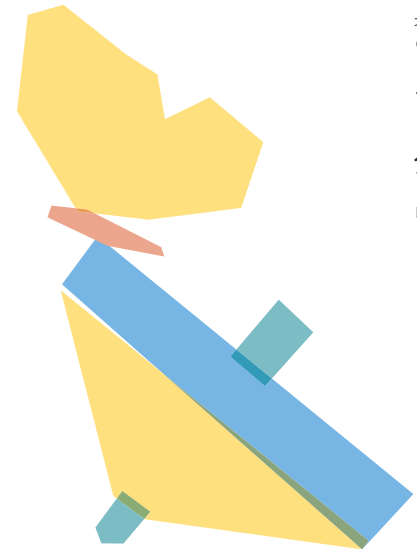
「動けば動くほど安定する。動かなければ不安定になる」
——このことをよく知るためには、玩具のコマを思い出してみるとよい。

コマは指やひもを使って回転の力を加えると、軸が立って回りだす。ところがだんだん回転速度が遅くなってくると、軸がぐらつきはじめ、やがてごろんと倒れる。つまり、コマは回転力が強いときほど安定し、回転力が弱いと不安定になる。わたしたちがつかもうとする幸福もこれと似たところがある。心地よい環境にひたつて動きを止めている安楽は不安定でもろい。動きのなかで感じている幸福は、安定して頑丈（がんじょう）である。

「幸福だから笑うわけではない。むしろ、笑うから幸福なのだと
言いたい」というアランの行動主義的幸福は、いろいろな
ことに広げて考えることができる。つまり——、

動かずにえられる平和などない。だから、平和を成すのだ。
動かずにえられる自由などない。だから、自由を活かすのだ。
動かずにえられる正義などない。だから、正義を行なうのだ。
動かずにえられる友情などない。だから、友情を築くのだ。
動かずにえられる愛などない。だから、愛するのだ。
動かずにえられる健康などない。だから、健康をつくるのだ。

幸いなことにわたしたちは生まれながらに、平和や自由が当然のように与えられた。が、それらは過去の人たちが苦闘のすえに勝ち取り、整えてくれたものだ。それを受け継ぐわたしたちは、その恩恵にじつとうまづくまっているだけでは、平和や自由は崩れてしまうだろう。それはコマが回転力を弱めたときにごろん倒れてしまうように。平和や自由は、ただ観念としてそこにあるのではなく、みなが平和を成すように動く、自由を活かすように動くことで、強く立ち上がってくるものなのだ。



14歳から
大人まで

生きることの根っこを考える

ふだんの[🍎]哲学

Philosophy for Everyday Living

『ふだんの哲学』は、中学生から大人まで読んでいただける思索のための小話集です。

学問的な哲学ではなく、ふだのできごとのなかからふかく考える種を見つけ、

ふだんに（不断に＝絶え間なく）心を健やかにしていく内容をめざしています。

ほかにもシリーズ記事がプロジェクトサイトにありますので、是非のぞいてみてください。

*本記事は営利を目的としない教育用途であれば、個人や学校・各種グループにおいてご自由にお使いください。

「ふだんの哲学」ウェブサイト

<http://careerscape.lekumo.biz/tetsugaku/>

村山 昇 (info@careerportrait.jp)

サカイシヤスシ (info@lantadesign.com)